

# 「伝統と近代化」

はじめに

アジアの社会構造は、伝統と現代といういわば複眼的視角に立脚しない限り、その解明は特に困難であると思われる。急速な都市化の問題、それに伴う人口変動と高齢者家族の問題、近代化を推進する原動力となる人材の育成（教育）の問題、近代化に伴って顕在する価値観の変化等々、これらの問題は相互に関連して複雑である。したがって、各国の政治、経済等の諸状況を充分考慮しながらこれらの問題に当らなければならぬと思われる。今回は、特に日本、韓国を中心にそれぞれが抱えている問題とその対応のあり方、将来への展望等を提供し合い、その意味するところを明らかにし、解決への糸口を探ることによって、今後の日韓両国の研究の礎石作りを期している。あわせて、日韓両国の学術交流の一層の進展を願い、総合テーマを「伝統と近代化」とした次第である。

## I. 近代化に伴う社会変動 ―その構造と意識―

### 近代化に伴う社会構造とその意識

朴 在 侃

#### 一、伝統的宗教儀礼と価値観の変化

韓国古来の伝統的信仰は、道教と巫俗祭礼でありました。しかし、三國時代に中国から儒教と仏教が伝わって来たので、これらの宗教が混合された民族特有の儀礼体系が形成されるようになりました。その後、李朝時代になって、崇儒排仏政策のため、あらゆる公式的な儀礼は儒教に基づいて行なわれるようになりました。

儒教に基づく儀礼体系というのは、宗廟、文廟、家廟を設置して、それに対する祭礼を行うことであります。

宗廟は王朝の先王たちを祭る祭壇を設けて、そこで祭礼を行うところであり、文廟（書院）は儒賢の遺徳を記念し、彼等を崇尚する意味で設けた祭壇であります。そして、家廟というのは、家門の祖先をうやまうための祭壇であります。

そのなかでも、特に、家廟の祖先神は、後孫の日常的行為を認知し、その幸福を守ってくれる神として最も大切にされており、後孫たちは、自身

の安全と社会的成功を望む意味で、真心をこめて、祖先神を祭るのであります。

李朝時代のなかばに入りにしたがって、韓国は性理学に対する哲学的理解が益々深まり各地には多くの書院が設けられ、儒教を崇尚する士大夫(両班)たちは先賢に対する祭りをを行うことが年例的行事になりました。

しかし、この時期においても、士大夫階級に属さない下層階級の庶民たちは、儒教儀礼と併行して、仏教とか、巫俗信仰による祭礼によって自身の安全と幸福を求める者も多かったのです。このような慣習は二〇世紀に至るまでも続いています。

儒教儀礼は李朝後期に入りながら権力化、世俗化、形式化してゆく傾向が現われ始めました。儒教の根本精神とは隔たりのある。展示効果的な儀礼に変質する現象も現れたのであります。それで当時の儒学者の中には、このような虚礼的儀式を批判する更張論を提唱したこともありました。

その後、実学派の学者たちは、儒教儀礼と、その制度の改革論を広範囲にわたって提唱したこともあります。守旧派にあたる既存政治集団の頑強な抵抗に逢着して、その意志貫徹することが出来ませんでした。

正祖大王(一七七六—一八〇〇)は、当時韓国にはいつて来た天主教(カトリック教)の信仰と、その儀礼が民草に良い反応を呼び起こすのは、儒教儀礼の世俗化と、墮落から来るものと判断しました。それで西欧式礼儀の侵入を防ぐためにも、儒教儀礼が正しい方向に啓導されなければならぬと力説しておりました。

儒教哲学の基本構造のなかの一つは、父子関係と家系の継承を通じて、家族の連続性を可能ならしめることであります。儒教思想の基盤である三

綱、すなわち父子、君臣、夫婦の関係においても、父子関係の規範である孝は、人間倫理の根本として、尊とばれました。儒教における君臣関係は、父子関係の拡大だとみなし、これはまた天地と自身との関係にまで拡大解釈されるのです。それ故に、孝は忠君とか、敬天事地の源泉の規範であり、人倫綱常の基礎であるともみなすものであります。

儒教における父子関係は、身体的、精神的に相互連結されているというのが、基本的立場であるのに反し、西学では、父子は身体的には連結されていても、靈魂は天主から受けたものであり、また靈魂は肉身よりも貴重なものであるから、天主は父母よりも上位にあると見なされています。

西学では現世は暫定的であるのに対し、死後の世界は永遠なものでありますから、これを最も重要視しなければならないという立場を取っているのであります。

このような、西学の来世志向的価値観は、儒教伝統の人倫秩序と道德規範の持つ、現世中心的意識とは、相反するとともに、現実的には、社会体制の権威に対する、否定的態度として現われるおそれがあったのであります。それで、当時の朝廷は、既存秩序の維持のためにも、儒教的儀礼の崩壊を防がなければならないという判断のもとに、強圧的手段を動員して、西学の侵入を防いだこともありました。

しかし、当時の朝廷は、時代的危機状況を克服する能力が不足していたため、既存儀礼体系は、次第に崩壊せざるをえなくなったのであります。

そして、権力もなく、たよるところもない、一般庶民たちは、仏教、道教、巫俗などによって、彼等の信仰的欲求を充足していたというのが当時の実態でありました。天主教が庶民大衆のなかに信仰運動として起ったの

も、このような社会状況と密接な関係があるといえます。

実学派が韓国人の意識を主導した時代に続いて登場した開化派の人たちも、初期においては、既存の伝統的儀礼を継承しながら、西洋からは新しい文物だけを導入しようと試みました。しかし、伝統的儀礼をそのまま存続していた状況においては、社会制度の改革も容易でないという判断をするに至ったのであります。

それで、伝統的儀礼のうち、断髮令、変服令、その他、多くの儀礼と慣習を改革して、近代化に備えようとする運動を起しました。このような状態のもとで天主教と改新教は韓国の近代化過程に大きな役割をしたことを否認することは出来ません。

第二次大戦後、西洋から渡って来たこれらの宗教は、急激にその教勢を拡大していきました。儒教と仏教も西洋宗教の影響を受けて、新しい活路を取戻しつつあるので、今日の韓国社会は、あたかも宗教の展示場化して行く様相が現われております。社会が現代化するに従って、多元化している韓国の宗教は、各々その位置と役割を再定立する必要性が要請されているともいえます。基督教は、大衆宗教として、土着化するのに成功したとはいえ、未だ韓国人の生活慣習とか、国民意識に密着していない異国的趣向が残っているという問題があります。儒教と仏教も近代的改革を成し遂げようとする努力はあるにしても、未だ伝統的意識に執着している傾向があるのです。それで、現実の問題を克服しなければならぬ今日の宗教としては、物足りないものがあるとも言えます。そういう意味で、これらの宗教は、現実に対応しようとする努力がより一層要請されるのであります。

## 二、李朝社会に於ける実学派の動きとその意識

先にも述べたように、韓国社会は李朝時代にはいつてからは仏教を排斥し、儒教を崇尚する政策に転換しました。儒教哲学で最も強調されたのは、道德と倫理であるが故に、政治においても、その理念にそって民を教化することに努めました。

当時の社会では、礼と楽は、民を教化する主要手段でありました。礼楽とは、社会風俗を醇化して、民の心を正しくするという意味を持っていたのです。そして、民を教化する方法としては、君主とか、統治者たちは、自己修養と道德行為を率先垂範することによって民が統治者を心から尊敬して追従するようにすることでありました。王様が権力を持って民を屈服させるのではなく、徳行を示範することによって民を感化するという原理であります。儒教的政治哲学は、王道政治であります。王道政治というのは、礼治と徳治をその基本理念にしております。従って、王道政治は、権力手段によって民を搾取する、いわゆる霸道政治とは根本的にその性格にことします。しかし、李朝時代の政治行為は、度々王道政治を仮装した霸道政治の登場によって、民を苦しめたことが少なくないのです。

儒教的政治哲学は、性理学が、その思想的、理論的基礎になっています。このような政治体制においての民は、士大夫という、両班階級によって、統治されるのが通例でありますので、政治自体は徳治であるといった場合においても、階級主義、権威主義であるというのが問題になったのであります。

それが故に、性理学的な政治思想は、道德社会を建設するという肯定的な長所もある反面、理想追求ということに、あまりにも重点が置かれていたために、当面した社会の現実的諸問題を効果的に解決して行くという努力が欠けていたという面もあるのです。

このような政治体制における問題と矛盾を改革しようとして、出現したのが実学派の人達であります。

実学というのは、虚に対する実を意味するのでありますから、實在的、現実的諸問題を解決しようとする学問であるとも言えます。

中国宋代の儒学者たちは、仏教哲学を虚とみなし、彼等の性理学を実学といったこともあります。韓国においては、高麗末から李朝初期（一二〇三―一四〇〇）にかけて、学者と知識人たちの間では、当時の仏教と道教は、もうすでに時代精神及び価値観としては、意味を失ったと判断しながら、新しい価値理念として受容した朱子学を実学と見なしました。

しかし、その後、朱子学は、年月が過ぎるに従って性理学論争とか、形式的な礼論、そして観念論的詩文、詞章学、等に没頭する安逸と墮性に落ち入ったため、社会理念を指導する役割を充分になうことが出来なくなり、この学問も虚文として墮落する傾向が見受けられました。

このような時代状況のもとで、当時権力集団から疎外されたか、または自ら権力から離脱した一部儒学者たちは、時弊を指摘し、時局を論じながら社会改革を主張し始めました。これらの動きは、始めは朱子学の基盤に沿って出発するが、彼等の学問的関心は現実的な民生問題の解決だとか、自由主義、平等主義、物質文化の向上などが政治において重要な課題にならないと主張しました。

そして、実学思想のなかには、開放精神、批判精神、などが明らかに表現されています。実学派を主導した人達は、朱子学の教条的、伝統的權威から脱皮して、陽明学、西学、老壮、仏教、考証学など、あらゆる知識とも接触しながら、それを肯定的に理解しようとする開放的態度で臨んでいた。在野の知識人と庶民大衆には大いに歓迎されたのであります。

しかし、このような実学派の思想と理念は、朝廷の権力集団を中心とする守旧派によつて抑制、または無視されました。守旧派の基本的認識は、衛正斥邪でありました。帝王道統、聖賢宗教、倫常道德、衣髪重制などを重要視した彼等は、実学派の思想を取り入れれば、①侵略勢力の犠牲になるかも知れないと思つていたし、②物質を強調する資本主義的秩序の採択は、道德秩序を尊重する儒教的伝統を崩壊させるおそれがあると考えたのであります。

実学派の実用主義が取り入れられなかったもう一つの理由は、当時実学派の人達は先きにもふれましたように権力から離脱して野党的立場におかれていながら執権集団の政策を批判したり、改革を主張していたので、両者間には常に緊張状態が続いていたのであります。

それで、彼等の主張がいくらいのことであつても、勢力葛藤という政治的理由で、それを受け入れられなかったという点もあります。

もし、一八世紀の韓国社会が彼等の思想と政策を受け入れたとすれば、西洋の勢力が本格的に東進する以前に、近代民族主義国家の形態を整えることも出来たし、また今日の韓国の姿も大いに変わったものになっていたかも知れないと思います。

### 三、西欧文物の受容と開化運動

西欧文物が韓国社会に入り始めたのは一六世紀初めからであります。西洋という存在が韓国に知られたのは、一五〇八年であり、天主教の教理とヨーロッパの地図が入って来たのは一六〇三年のことです。一六三一年には火砲、望遠鏡、時計、天文学、そして天主教に関する書籍などが中国を通じて入って来ました。このような西洋文物の導入によって、韓国社会は未だ経験したことのない多くの知識を得ることが出来ましたが、その反面思想的には、少なくない衝撃を受けました。

韓国において西洋文物の導入が本格化したのは、一九世紀後半、天主教と改新教が国内で自由に宣教活動することが許されて以来のことです。このような措置が取られて以後、西洋からは、数多くの宣教師たちが渡来して医学と科学技術、教育制度などの改革に協力してくれました。

政府は一八八一年、近代科学技術を学ぶために、中国と日本に留学生を派遣し、一八八三年には西洋式教育機関が国内に設立されました。また、一八八四年に郵政局を設置して、通信業務を近代化し始めました。一八八五年には清国と合同して、ソウルと仁川間、ソウルと義州間、義州と清国間に電信網を架設し、続いて、ソウルと釜山間、そして海底線によって日本に至る電信が架設されました。一八八四年には、農業技術試験所を設置して、アメリカから農業と牧畜の技術を受け入れ始めました。植物学、動物学、生物学、医学など近代的学問が入ってきたのも、この頃からのことでもあります。特に、医学においては、一八八五年、アメリカの宣教師によっ

て、設立された済衆医院が西洋医学導入の基礎となりました。一八九九年には、医学専門学校が設立され、一九〇四年には、ソウルに大規模な綜合病院が設立されました。

このように、韓国は一八八五年以後、近代的科学技術の導入を通じて、交通通信施設と医学、農業など、各分野において、発展の契機をとらえたが、その成果の大部分は清国、日本、アメリカ等、強大国の援助によったものであるためにこれらの国々は、韓国に対して援助に相当する利権を主張するようになりました。

当時の韓国は、守旧派と開化派の激しい論争の渦中で、政策自体も一貫性が欠けていたと思います。守旧派たちも、科学文明は積極的に受け入れなければならぬという態度を取りながらも、一方においては、外国との通商拡大政策は、ややもすれば国家の基盤が根底から崩壊されるかも知れないという危懼心のため、鎖国論と開港論の論争をくりかえしながら、うろたえた状態でありました。

当時の韓国は、祖国近代化という絶対的大命題を目の前において、開化思想と斥邪思想、それから親清派、親日派、親露派間の勢力葛藤と政策対立のため、国力は四分五裂するという混乱におちいったという状況でした。

一方、韓国の朝廷は、一九世紀末に至るまで、守旧派によって掌握され、守旧派は、現実とは乖離された状態で、益々教条化、硬直化したし、そうなればなるほど、国家は伝統的体制の正当性を保証する道徳性、倫理性を喪失していきました。官僚体制による権力の独占と階級的差別の深化は、相対的に階層間の葛藤を誘発する原因にもなりました。社会体制が権力集団による抑圧と搾取から大衆を保護する機能が弱まった時は、該当体制に

対する離叛勢力の胎動は不可避免だと思います。

当時の社会相を分析して見れば、霸道政治と官僚の腐敗は最悪の状態でありましたし、既存体制に対する国民の怨声は益々高まった状態でありました。儒教的倫理規範を率先して示範しなければならないはずの士大夫(両班)たちは、虚飾的、偽善的、形式的態度を取り、彼等が行う礼制は身分と權威を維持するための手段に転落しました。

このような、社会的背景のもとに、西学が韓国社会に紹介されました。それで、当時階級社会の矛盾を拒否する階層には西学が理想的合理的新秩序として、受け入れられざるを得なかったのです。特に権力集団から排除された知識層と中人社会を形成する大衆のなかには、その支持基盤が形成拡散されて行きました。

伝統的規範によって、行動の制約を受けていた婦女たちは、西学を通じて、自由と生存の意味を見付けようとする傾向を現わしました。権力集団の腐敗、庶民生活の破綻、現実に対する挫折を感じていた一般大衆には社会改革を通じて、その活路を開こうとする欲求が強かったため、西洋から渡来した思想は彼等にとっては福音として受け入れられたのであります。

韓国の開化運動は、一九世紀にはいつてから先覚的少数エリート階層によって主導されました。彼等が始めに提唱した理念は、東道西器論でありました。東道西器論というのは、性理学の理念に基づいて、伝統文化の主体制を保存しながら、西洋からは物質文明と若干の制度的長点だけを受け入れて、東西両方の調和を保とうということです。韓国の開化運動は、自国の文化的伝統を守りながら、そして、近代資本主義侵略主義勢力

の挑戦に、用心深く対応しながら、国の近代化を試みた運動であるともいええます。彼等の思想は、政治的には自由民主主義、経済的には産業資本主義的生活を持っていました。

新聞の発刊は、開化運動を展開するのに大きな役割を果しました。開化運動を主導した先覚者たちは、運動をより効果的に展開するためには、大衆啓蒙と教育が先行しなければならないと信じ、一八八三年には漢城旬報という新聞を発行し始めました。この新聞は、近代化文物の紹介と民衆啓蒙に大きな役割を果しました。その後、一八八六年には、日刊の独立新聞が発行されました。独立新聞は、民主主義精神のもとに、民衆たちには、近代化社会に適応する生活態度をになうよう呼びかけましたし、政府に対しては、かれらの保守的態度を鋭く批判する立場をとりました。

新聞が始めて発刊された一八八三年以来、韓日合併に至る一九一〇年までの十八年の間、韓国では漢城旬報をはじめ、独立新聞、大韓民報など、三十余种の新聞が発行されました。これらの新聞は、時代的背景と発行主体の性格とにより、多少異なるところがあつたにしても、その主な論調は、自主精神の強調、外侵の警戒、開化自強などを呼びかけたのが特徴だといえます。

開化運動は、侵略に対する警戒をおこたらなかったにもかかわらず、ついには国権を喪失する悲劇を招きました。開化派の努力が失敗した原因は色々ありますが、そのうち主なものをあげれば、①封建社会の基盤は解体しつつあるのに、これに代置すべき市民勢力が形成されていなかったこと、②開化運動を主体的に展開するだけの国力がなかったため、運動自体を外勢に依存しなければならなかったこと、③西欧の思想と文物を導入

するにあたつて、また日本が提供する援助を受け入れるにおいて、彼等が協力してくれる意図とか、本質を正しく理解しようとする努力が欠けていたということなどであります。

#### 四、国権喪失期における社会構造と民族意識

日本による武断政治が始まつた一九一〇年からは、韓国人は侵略者たちにより、農土と財産を収奪され、意思の表現までも抑制されるなど、経済的掠奪と思想の統制が徹底的に行われました。

植民地政策のもとでの韓国人は、自らの伝統的思想を考察、整理、または統合しようとする努力自体が抑制されたので、彼等は近代的、主体的意識を持つことも出来なかつたし、また市民として遂行しなければならぬ責任が何んであるかを自覚する機会も源泉的に封鎖されたのであります。

農耕社会であつた当時の韓国は、強圧的手段によつて農土を掠奪される人々が増加することによつて、離農集団という、かつて経験したことのない新しい社会集団をうみ出しました。彼等はプロレタリアと呼ぶには、あまりにも、農民的集団であつたので一つの階級として分類するよりは亡国流民とか、乞人といった方がいいかも知れません。

合併当時、韓国の農民は全人口の八五パーセントを占めておりましたが、一九三一年にはそれが七八パーセントに減つていたのに反して、離農流浪民は七・三八パーセントという高い比率をしめておりました。日本人経営農場の小作人に転落した多数の農民は離農流浪民とは区別した比率であります。小作人に転落した人たちまでを合せればその比率は一二・〇パー

セント以上になると推定されております。

侵略勢力による弾圧と搾取が露骨になればなるほど、韓国人の意識のなかには外族嫌悪と民族主義的感情は激化して行きました。

一九一九年、三・一独立運動が起つたのは、このような社会的背景のもとでは必然的な結果であつたともいえましょう。当時の独立運動は民族的な規模でありました。この運動に参加した地域は全国二八四個郡（行政単位）のなか二二一個郡で独立運動の群衆テロが起りましたし、参加人数は二百万人をはるかにこえていたのであります。

運動の主体的役割をしたのは、宗教団体の指導者たちでありましたが、学生集団はこの運動の導火線の役割をはたしましたし、これに農民たちも自然発生的に加わつたのです。

日本官憲の厳しい弾圧にもかかわらず、被占領期間を通じて、韓民族による抗日運動はたえまなく継続されました。抗日義兵による国内での武力抗争、光州学生事件、朝鮮語学会事件、韓滿地帯での独立軍の活動、上海の韓国臨時政府とアメリカに本拠をおいた国民会の独立運動、それから在日韓国人たちが組織した各団体も、この運動に積極的に参加するなど、国内外で占領政策に対抗する運動が相次いで起つたのであります。

この時期における韓国の言論は侵略勢力に対抗する武器として大きな役割をはたしました。

韓国において市民意識が目芽え始めたのは、一九世紀末頃からであります。しかし、このような市民意識が表面化したのは、一九一九年の三・一運動のときからであるといつてもいいと思います。

一九二〇年を前後して、韓国の民衆のなかで広く歌われた朝鮮自由歌と



か、独立歌の歌詞のなかには、自由、人民、独立、民族などの用語は用いているが、王制復旧を意味する内容は全然見うけられなかったものであります。当時民族代表たちによって発表された独立宣言文にも、近代民主国家を提唱する内容はあっても、王制復旧をとる用語は見出だせませんでした。

このようなことから見ても、当時韓国人の意識のなかには、民族主義による自由独立という欲求は強かったにしても、それは決して伝統的君主体制への復旧ではなかったことが分ります。その当時日本による韓国統治政策の重要課題の一つは、民族固有の伝統と文化を抹殺することでありました。文盲政策を取ったり、誤まった歴史教科書を教えたり、韓国語の使用を禁止したのは、皆そのような政策遂行の一環として見なさなければなりません。このような文化社会的環境のもとで育った無知な若者たちの中には体制順応的態度で世渡りをする者も決して少なかったとはいえません。占領期間が長びくにつれて、民族としての価値観を喪失するか、または思想的にアノミー現象に陥ちいる者が増えて来ました。また知識人のなかにも潜在的には民族感情を持ちながらも、社会生活においては、環境適応的態度をとらざるをえなかったのが当時の社会環境でありました。

韓国の伝統的社会構造は士農工商で区別される徹底的な階級社会でありました。士大夫階級は権力もあり、社会的身分も高かったのであります。それに反して、商工人は奴隸とあまり変わらない賤民扱いをされました。しかし、国権喪失によって、権力は外人が握るようになったので、士大夫という階級は自然に消滅せざるをえなくなりました。一九三〇年代になつては、商工人も両班家門の人達と平等な地位でつきあいが出来るように

なつたので、階級社会は解体されたと思えます。

階級社会はこのように解体されていたにもかかわらず、伝統的家族制度と、その倫理基盤は、あまり崩壊しなかったというのがこの時期の特徴であるといえます。家族制度が崩壊しなかった原因は三つあります。一つは、伝統的家族制度は農耕社会では順能的長点がありますが、当時の韓国社会は農耕社会であったという点です。もう一つの原因は、日本支配下に於ける韓国社会では基督教が抑圧されたことも関係があります。先にも述べたように、儒教哲学における父子関係の理念は、基督教的家族倫理とは根本的に違うところがあります。それで基督教の排斥によって家族制度と家門の維持をさまたげる要因がなかったともいえます。また一つの原因は、韓国人の意識のなかには国権は失つたにしても、家門と家族制度の伝統だけは、そのまま守ってゆきたいという欲求が強かったのも、家族制度の崩壊をふせぐのに大きな役割をしたといえます。

## 五、韓国社会の現状と未来の課題

西欧諸国のなかには、市民革命を通じて、近代化を成就した民主主義を定着させた国が多いのです。市民革命を経験した国家は、民主主義制度を發展させるに於いても、各自自国の伝統を背景にした歴史的発展様相に従って、民主主義を定着させたために、その形態も国によっておのの異なります。このような観点から見れば、韓国の民主主義は伝統的、文化的背景とか、既存思想、国民意識の流れとは完全に遮断された状態を外勢によって移植されたというのが特徴であります。過去の歴史を回顧して見れ



ば、韓国に外来思想を導入させたのは、当時の社会構造とか、国民意識とは関係なく、外勢の影響、または権力集団の独断的決定によって、その受容が強制された場合が少なくないのです。李朝初期の崇儒思想、一九世紀の開化思想などがその類型に属します。

韓国に民主主義制度と、その思想が導入されたのは、第二次大戦以後のことです。それは内因的必然性、すなわち市民たちの自発的改革意識によるのではなく、外勢によったのであるが為に、これを社会制度とか、国民の生活様式として、定着させるためには、相当な時間を要するというのが一般的認識であります。

民主主義というのは、国民の日常生活における意識と社会制度が表裏一体の関係にありながら、各自の人権が尊重され、思想と結社の自由、行動の自由などが、制度的に保障されなければならないのであります。

しかし、韓国においては、去る四〇年間、第一共和国から第五共和国にいたるすべての政権は、憲法とか政治制度は民主主義体制の姿を保ちながらも、その制度を運用するにあたっては少なくない問題を起していたというのが今までの実状だといえます。彼等が主導した民主主義は形式的な看板に過ぎないことが多かったし、民主主義の解釈においても、政治指導者のあいだで意見が一致しないことが少なくなかったのであります。一般国民は権力を握っている人達によって、たびたび人権が侵犯されたり、意思の表現が抑制されることもありました。

しかし、韓国は一九六〇年代から八〇年代に至る二〇年間、経済成長による生活水準の向上と、高学歴者の著しい増加によって国民の中には、市民としての権利を主張するものが増えて来ました。それで、形式的な民主

主義体制、硬直化した政権に対する国民の不満はたびたび政権に反対する国民運動という姿で現われました。

第二次大戦以後、韓国は世界にその類例が見られないほど、急激な社会変動を経験しております。

韓国動乱を通じての社会動員、農地改革と義務教育、それ以来、継続して行われた社会学習、そして六〇年代から始まった経済開発の推進などによって、韓国社会は意味ある質的变化を起しております。

二〇年前までは、無知、貧困、失業がもっとも重要な社会問題であったのに比べて、今日の社会は、教育水準も高く、中産層が全人口の過半数を占める安定した社会に変わっております。

政治的、思想的自由は抑制されていたにしても、職業選択の自由、消費生活の自由が保障されているし、学習の機会が与えられ、市場機能を通じて自由に企業を経営することが出来る社会システムの中に住んでいます。

韓国の家族制度とその倫理基盤は、他のどの民族よりも、厳格かつ、堅固であるので社会構造の変化が激しい今日の社会においても、未だその規範が根底からくずれるような徴候は、見られません。

しかし、七〇年代以後産業化社会の急速な進展と新しい文化の導入によって、既存の家族関係または家族形態は次第にくずれつつあるということとを否定することは出来ません。

最近若者たちの家族観は、従来の上下関係よりは、横的な平等関係が強調されているし、核家族が普遍化しつつあるなどの点から推定すれば、韓国も近い将来、高齢者の扶養は社会がその責任の多くの部分をになうような時期が到来することは必然的であると思います。

韓国の社会は、今後益々多元化して行くことが予想されます。社会問題に対する市民の参加意識はより一層高まって行くと思います。低所得階層は福祉に関心を持つようになると思います。各種の社会团体は、組織的に所属集団の利益を主張するようになるでしょうし、家族間においても、個人主義的傾向が強まるようになることが予想されます。

韓国社会は今後解決してゆかなければならない多くの課題をはらんでいます。その中でも一番重要なことは、貧富の格差を減らすことです。

第二次大戦後、農土を分配したお陰で、農村においては、所得の差が大分減っておりますが、その後社会構造が産業化するに従って、階層間、地域間、世代間の所得格差があらためて社会問題として登場しました。

それで韓国は、今後、完全雇傭、公正な分配、教育の普遍化を通じて相対的貧困、機会不均等などの問題を解決して行く努力が要請されます。

韓国は過去二〇年間、経済的成長は、比較的成功しているのに反して、議会民主主義は発展しきれなかったので産業の進展が社会の民主化に連結されなかったという欠点も見いだされます。

それで、今後解決しなければならない課題のなかには、政治権力の分散、議会政治の活性化、地方自治制の実施を通じて、国民大衆が国家の政策決定過程に直接参加する機会を拡大して行くことが要請されます。

産業化社会における最大の欠点とみなされるのは、巨大な産業システムの中で、かえって、人間が疎外されたり、人間性自体が喪失するようなことが起こりがちだということです。

それで韓国社会が今後解決しなければならない最大の課題は、利己主義、合理主義、物質主義などが威勢を振うことが予想される未来社会において、

倫理と道徳が尊重される儒教的価値規範をどう生かして行くかという問題であります。